

現代における技術のあり方と人間性

On Current State of Technology and Humanity

田淵 義英・佐藤 あゆみ*

福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科

*埼玉大学教養学部

Yoshihide Tabuchi, Ayumi Sato*

Fukushima National College of Technology, Department of Communication and Information Science

*Saitama University, Faculty of Liberal Arts

(2014年9月18日受理)

This thesis is an argument about coexistence of current technology and humanity. Firstly we try to prescribe the meaning of “humanity” as three human nature, “unsettledness”, “subjectivity” and “uniqueness”, referring some arguments about technology and human by ancestors. Secondly we reflect the way we develop and use technology today. Finally we reveal that however current state of technology is contributing to amplify “unsettledness” by extends our technical ability, on the other hand it is causing an alienation of “subjectivity” and “uniqueness” by monopolize sense of value and style of life.

Key words: technology, humanity, human nature

1. 序論

1.1 技術発展における諸問題

技術は人類の歴史における最も普遍的な営みの一つである。原始時代の火の使用も、今日の電子機器の使用も「技術」によってなされていることには変わりはない。しかし人間のなしうることの範囲は劇的に拡大し、今や人間は自然を思うままに破壊・再生し、地球から飛び立って宇宙空間に滞在することもあれば、動物や人間の体を改造し、生命を持続させることもできる。技術の進歩は人々の生活をより快適にしたり、貧困や病気に苦しむ人を助けたりすることにつながるため、基本的には望ましいことであるとされている。しかし他方、発展した技術がもたらす問題はとりわけ産業革命以降長きに渡って指摘され、これまでさまざまな分野の技術とその成果について批判がなされてきた。

例えば、産業革命期の急速な技術進歩は人間の進歩を促すと楽観的に考えられていたが、産業革命による資本主義的工業化は実際にはさまざまな矛盾を抱えていることが明らかになった。工場の製造過程への機械技術の導入は身体的な労働の軽減や作業効率の向上、人的ミスの削減などに役立ったが、一方ではマルクスの資本主義批判をはじめとして、人間が貨幣の増殖のための手段として機械のように、あるいは機械に支配されて労働する

ようになった、つまり機械技術の導入は人間の非人間化であるとの批判も生まれた。

機械文明は大量生産・大量消費のスタイル確立につながり、20世紀半ばには自然環境の破壊や汚染といった問題を顕在化させた。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（1962）は農薬などの化学物質が環境に及ぼす危険性の告発によって科学・技術の進歩の「負」の側面を訴えた。その後、酸性雨、オゾン層破壊、資源の枯渇などの問題が表面化したことを受けて1970年には地球環境を考える日としてのアース・デイが、1972年には「Only One Earth かけがえのない地球」をスローガンとする国連人間環境会議が発足し、1992年の「Sustainable Development 持続可能な開発」を目指す国連環境開発会議がそれに続いた。

戦争もまた、技術の発展を大きく促す出来事であった。米ソ冷戦の時代には核とコンピュータの開発が、ナチズムから逃れたユダヤ人学者が加わった連合国側の戦時研究において大きく進歩した。1934年にはフェルミがウランから大量の放射線が発生することを発見し、人工放射能が誕生した。そして1942年以降に本格化したアメリカのマンハッタン計画で誕生した原子爆弾が1945年に広島と長崎に投下され、人間の作りだした技術がその利用方法によっては人間を滅ぼす可能性があることを知

らしめた。

一方で原子力は「平和利用」として人間が利用する大量の熱エネルギーを発電するために用いられている。原子力発電は日本においても政府やメディアによって推進され、1963年に初の原子力発電所が開業した。現在日本には54基の原子力発電所があり、人々に電気を供給しているが、同時に原子力発電は依然として多くの問題を抱えている。とりわけ2011年の東日本大震災を経験した今日では、原子力の利用が本当に「安全」であるかどうかには疑問の眼が向けられているという現状がある。

これらの例において問題とされているのは「技術」そのものではなく、技術の「あり方」のほうである。つまり、近代 から今日にいたる技術革新の中で、高度化した技術を「どのように用いるべきか」は実際的な面からも、また思想的な面からも絶えず問われてきたのである。

1.2 技術と人間の不調和

技術のあり方をめぐる諸問題は技術と人間の不調和の問題と捉え直すことができる。技術はそもそも、自然環境の中で人間が生存するための手段であり、人間に不可欠なものであった。しかし上の諸問題が示すように、技術は人間にとってよい方向にばかり働いてきたのではなかった。松井は、近代社会は「必然性」「確実性」「完全性」「合理性」などの価値に重きを置くことで技術を発展させたが、その技術発展によってもたらされる矛盾が明らかになったことを受けて、現代では「偶然性」「不確実性」「不完全性」「自然性」などの価値の見直しが図られていると指摘した(松井 2003:4)。

松井が挙げた対照的な四つの価値、すなわち「必然性—偶然性」「確実性—不確実性」「完全性—不完全性」「合理性—自然性」は、「無機的なもの—有機的なもの」という対立に対応している。「無機的なもの—有機的なもの」の対立は「人工物—人間」の対立でもあることから、技術の発展を考えると、技術の目的が人間の幸福であるならば、同時に人間的なものの価値にも着目しなければならないということが現代の課題となっている。「人間的なものの価値」は一般に「人間性」と呼ばれる。加藤尚武は「二十一世紀文化の課題」として科学技術と人間性との調和を挙げ、「人間の科学技術は、人間性をゆがめてはならない」と述べている(加藤 1996:7)。

人間性を脅かすことなくいかに技術を用いるかという問題は、技術によって人間のできることの範囲や影響力が拡大した現代における最重要課題の一つである。われわれは技術と人間性を両立させなければならない。しかし「人間性とはなにか」と改めて人間性の内容を尋ね

られると、なにが人間的で、なにがそうでないのかということについての認識は一般化されていないのが現状である。

以上より、考察すべき二つの問題が見えてくる。第一に技術と人間性との調和の問題、そして第二に「人間性」とはそもそもどういう中身をもった概念なのかという問題である。しかし「人間性」の中身が不透明なままでそれと技術との調和について論じることはできない。したがって本稿では先に「人間性」概念についてまず考察し、その成果に基づいて現代の技術と人間性の調和という問題を考察することとしたい。

2. 既存の技術論における「人間性」概念

本章の目的は現代における技術のあり方を考察するための理論的枠組みとして「人間性」概念を構築することである。その前段階としてまず既存の技術論を概観し、そこで人間性がどのように規定されているか、あるいはどのような人間性が前提とされているかを考察する。

「人間性」概念の理論的枠組みの構築のために「技術論」を用いるのは、本稿の目的が「人間性との調和のとれた技術のあり方」を探ることであり、人間性とは何かを問うと同時に、人間にとって技術とは何かを問う必要があるためである。また、技術とは何かという問いは歴史的に普遍的な技術の認識のみならず、現代という特定の歴史における技術を問うことでもある。そのような模索によって初めて、今日における技術のあり方を考察することが可能となると思われる。したがって「人間性」概念の理論的枠組みの構築のために既存の技術論を用いるが、それらの技術論は三つに分類できる。第一に「人間固有の特性」から技術を規定する「生物学的技術論」、第二に古代ギリシャのポリスのあり方や古代ギリシャ以来の存在論の伝統から技術を論じた「ギリシャ哲学的技術論」、第三に技術を用いる現代人のあり方を考察した「道徳的技術論」である。

2.1 生物学的技術論 —ゲーレンの考察

アルノルト・ゲーレン(1970)は生物学的な観点から「人間の生存条件を問うこと」をその設問の要とした。彼は人間を「行為する動物」(Gehlen 1970:20)と定義し、「行為」を着手点として「行為の立場に立って一般人間学を打ち立てる」(Gehlen 1970:17)という課題に取り組んだ。その考察は以下のようなものである。

一般的に人間以外のあらゆる種の動物はその身体機能や本能が完全に適応する自然環境が決まっており、その中で暮らしていく。それに対して人間は特定の自

然環境をもたず、その生存条件や行動様式は「未確定」である（Gehlen 1970:12）。そのままでは身体的にも本能的にも自然環境に適応できない未確定存在者である人間は、「行為」によって生きながらえる。行為とは「予見と計画に基づいて現実を変化させるということ」（Gehlen 1970:17）であり、行為によって「変化させられた、ないしは新たに作られた事実と、それに必要な手段との総体」（Gehlen 1970:17）が文化である。すなわち人間は特定の自然環境に組み込まれていない代わりに「行為」することができ、それによって生じる「文化」の中で生きるのである。動物の生活圏が環境であるのに対し、人間の生活圏は「文化圏」である（Gehlen 1970:31）。また、動物が「環境」をもつのに対し人間は「世界」をもつ、ということもできる。これは人間が「有機的に特殊化しておらずにすべての刺激に門戸を開いており、何ら特別の自然布置に適応しているわけではない」（Gehlen 1970:34）ためである。この指摘は人間の表象能力に着目したものである。人間はいま己が直接的に接している世界を越えて、過去や宇宙に想いをめぐらすことができる。つまり知覚しうるものあるいは想像しうるものすべてが人間にとっての世界であり、このような世界を人間は所有しているのである。このような性質を「世界性」と呼ぶ。したがって人間の生物学的に本来的な性質は、生まれもった身体や本能の「未分化性」あるいは「欠如性」と、それによって人間が方向付けられていない動物であることを意味する「未確定性」、そしてこれらの条件によって生じる「世界性」である。人間は行為によって文化を作り、生活する。「行為」は「構造上、単なる有機的手段によっては生きていられないような存在者が世界の構造変革をおこなう」ことであるから、「ほかの何らかの本質特性と同じように人間にとっては中心的なもの」である（Gehlen 1970:222）。

ゲーレンの考える「行為」は、それによって人間が文化圏あるいは世界を創造するところのものであるため、本論の文脈では「技術」という言葉に言い換えることができる。したがって行為＝技術は、動物がその専門化した能力によって環境に適応するのと同様に、人間が未知と不足の「世界」で生きるために用いる術であると言える。

2.2 ギリシャ哲学的技術論

2.2.1 アレントの考察

ハンナ・アレントは古代ギリシャの都市国家ポリスを参照した全体主義論考のための政治哲学書として『人間の条件』（1958）を記した。彼女は「人間」を条件づけ

られた存在として定義した。その条件は「生命そのもの」、「世界性」、「多数性」であり、それぞれには「労働 labor」、「仕事 work」、「活動 action」という活動力が対応している。

「労働」は人間の生物学的生命の必要を満たすための活動力であり、他者の存在を必要とせず、完全な孤独の中にある。「世界性」「多数性」が人間の社会性に基づいているのに対し、労働はただ単に生物として人間を生かすためにある。よって労働は「仕事」や「活動」とは異なり「特殊に人間的な特質を失って」いるのであり、労働する存在は「もはや人間ではなく、まったく文字通りの意味で〈労働する動物〉 animal laborans」である（Arendt 1958:44）。

「仕事」は人間の「世界」を人工的に作りだす活動力であり、仕事をする存在は「工作人」と呼ばれる。この活動力のもととなるのは人間の「可死性」である。人間は自然環境に生きる生命のように「種」としての大きな生命を生きているのではなく、一人一人がそれぞれの人生を生きているため、「種」の存続は人間にとって「永遠の生」を保証するものではない。この意味で人間は死すべき存在であり、それゆえ永続性をもつ物の世界を構築する。個々の人間の生命が終わっても、「この世界そのものはそれら個々の生命を超えて永続するようにできている」からである（Arendt 1958:19）。

「多数性」は最も人間らしい条件である。今生きている者、過去に生きていた者、そして未来生きていくであろう者の中には、誰一人として同じ人間は存在しない。ゆえにわれわれは互いに異質であり、予見不可能である。そのような「多数の人間 men」が他人と共通の「公的領域」に姿を現すには、言論と活動によっておのれの「正体」を示さねばならない（Arendt 1958:291）。これは人間がまさに「人間として」生きるための必須な条件である。というのも人間は他人への労働の強制によって自分で労働しなくとも、あるいは物を作らずに使用するだけの生き方を選ぼうとも生きていけるが、言論と活動を欠き、他人と共通の世界にまったく姿を現さない人間は「世界から見れば文字通り死んでいる」からである（Arendt 1958:287）。

「労働」によって保証される人間の生命は永続するものではなく、その永続性は「仕事」が物の世界を生み出すことで保たれる。しかしこの物の世界はあくまで有用性がなければ意味をもたず、物は一定の意味秩序の中におかれて初めてその物としての「商品」や「芸術作品」などといった規定性をもつのである。そしてこの意味秩

序を可能にするのが、すなわち「世界」を「世界」たらしめるのが、「活動」である。したがって、人間の基本的な活動力のうちで「多数性」に対応する活動力の「活動」が最も重要な活動力となる(伊藤 1991:97)。

2.2.2 ハイデガーの考察

マルティン・ハイデガー(1949)は技術を文明形成の一要因としてではなく、ものの存在を規定する要因として捉え、以下のように主張する。技術の本性は中立的な行為のうちにあるのではなく、むしろ人間や社会のあり方を根本的に規定するところにある(石田 2007:44)。技術の本性とは「発露 Entbergen」すなわちあるものを現実の存在として現出させることである。例えば神への供え物を乗せる銀皿は、職人の手によって、銀という材料が、神への供え物という目的のために、皿という形をとって現実世界に姿を現したものである。技術とはこのようにあるものを存在として現実世界に現すこと、すなわち発露の一仕方である。

近代技術も発露の一仕方であるが、その本質は「徴発性 Gestell」すなわち物をたんなる原材料として動員し、要求に服従するよう自然を「立てる stellen」という性格にある。徴発性に支配された近代技術社会では、人間は他の物や自然と同じように「役立つもの Bestand」として技術のために動員され、主体性を喪失させられている。「〔近代〕技術とは近代世界に属するすべてものが支配に役立つものになるような文化形式である」(Feenberg 2004:271)。

近代技術社会においてハイデガーが問題とするのは、人間の命運 Geschickに対する閉鎖性である。命運とは、人間を固有な使命つまり本来のあり方へと派遣するものである。人間には本来のあり方が命運として示されるはずであるのに、近代の科学的-技術的世界においてはその命運は閉鎖されて姿を消しており、人間は技術の徴発性に駆り立てられて自己を喪失しているのである。

人間はその日常において他者と出会う。他者とは「自分以外の人々」ではなく、「自分もその中に混ざっている人々」である。この中で人間は周囲に同調し、周囲との差を埋めようとする。人間はこのような非自立的なあり方をしているとき自分自身を見つけ出せず失っており、「だれでもない者」として存在する(Heidegger 1927b:122)。したがって非自立的な人間のあり方は「本来の」、すなわち自ら選び取ったあり方から区別される(Heidegger 1927b:360)。

しかしハイデガーは非本来のあり方を断罪するのではない。本来のあり方、非本来のあり方のどちら

でもすることができる点がすべての人間の共通性質だからである。ハイデガーが近代技術を批判したのは徴発性によって人間が非本来的になるためではなく、本来的なあり方をする可能性が閉鎖されるからである。

2.3 道徳的技術論

2.3.1 アンダーズの考察

ギュンター・アンダーズ(1988)は、現代を技術が支配する時代とみなし、技術が歴史の主体であるのに対して人間は「歴史についてゆく」追従者であるとした。そして現代における「形而上学的」に象徴的な技術として原子力に着目し、以下のように考察した。

原子力はその物理学的な新しさではなく形而上学的な性質において特殊であり、他の技術のように単なる「手段」と見なすことはできない。なぜなら原子力とりわけ核兵器の効果はあまりに巨大であり、人類全体およびその記憶の存続をも揺るがす可能性をもつからである。このような恐るべき巨大性は人類を終末=アポカリプスに導くものであるが、現代の人間はこの危機に対して全く不安を感じない状態、すなわち「アポカリプス不感症」に陥っている。アポカリプス不感症とは道徳的想像力の欠如であり、その原因は「プロメテウスの落差」と「進歩信仰」にある。プロメテウスの落差とは、人間の知りうるものや創造しうるものと、想像しうるものや感じるものとの間の差である。何千人もの人々を殺すことはできても十人の人の死の恐怖を感じることはできないのと同様に、人間は核兵器について知っていても、その恐怖を本当に理解しているわけではない。プロメテウスの落差は「知識」と「想像」のあいだの落差であり、行為の結果に対する道徳的な想像力の欠如を意味している。

現代人が終末への不安を感じないもうひとつの原因は、歴史を「前進し続けるもの」として考える18世紀以来の「進歩信仰」である。進歩信仰は「世界は絶えずよりよくなっている」という確信から「終わりのない歴史」を信じ、悪いものと世界の終末そのものを消し去った。したがって、進歩を信仰する人々は世界の終末を考えてみるができないのである。

また、アポカリプス不感症の背景にあるのは「中間性」、すなわち現代の企業労働が生み出す組織に順応的な人間の性質である。企業にとっては労働者は自分のすることが本質的に何であるのかということは考えず、ただ言われた通りに働くのが望ましい。労働者のほうも製品はすべて道徳的に中立であると信じており、また企業を営むのは自分だけではなく共同体であるという意識から

作業に対して「能動とも受動ともつかない」、中間的なあり方をしている (Anders 1988:302)。「中間人」である現代の労働者に必要なのは作業を実直にこなすことであって、その作業の目標や結果についての道徳的想像力ではない。このような仕方現代人の中間的なあり方は労働の成果を「善悪の彼岸」(Anders 1988:303)に迫り、「終末」を理解するのを妨げるのである。

アポカリプス不感症の克服には道徳的想像力の形成が不可欠である (Anders 1988:286)。現代人はプロメテウスの落差を克服し、想像力と感情の能力を、おのれがなしうることの影響や結果の規模に合わせなければならぬ。感情の能力拡大は、人間が「たゆまぬ歴史的变化」を伴う未確定な存在であり、その感情が慣習によって歴史的に緩やかな変化を遂げてきたことから可能であると考えられる (Anders 1988:325)。

2.3.2 イリイチの考察

イヴァン・イリイチ (1973) は技術が人間にその使用を強いる構造に着目し、制度化された技術のあり方を逆生産性の発生という観点から以下のように批判した。

逆生産性の発生とは、技術が「一定の強度を上回って成長するとき、不可避免的に、その利点を享受しうる人々よりも多数の人々を、その道具が作られた目的から遠ざけてしまう」(Illich 1989:163) こと、つまり技術が当初の目的に反する結果を生み出してしまうことである。例えば医療の発展は個人の健康に貢献したが、その発展がさらに進むと医療の制度化によって人々の医療依存が強化され、個人の健康管理能力の著しい低下や医原病を招いた。医療が「人々の健康」という目的に反する結果につながり始めたのである。

逆生産性が発生する理由は産業主義的な道具の過剰成長にある。この場合の「道具」は技術と同じような意味であるが、一般的な技術に加え「制度」の意味も含む。物理的な商品のみでなく「教育」とか「健康」とか「知識」とか「意思決定」とかを生み出す触知しえない商品の生産システムも「道具」である (Illich 1989:38)。道具にはコンヴィヴィアルなものと同様に産業主義的なものの二種類があり、前者が「それを用いる各人に、おのれの想像力の結果として環境を豊かなものにする最大の機会を与える」のに対し、後者はそれを用いる人々を単なる消費者に乏しめ、そのような機会を奪う (Illich 1989:39)。現代の道具の大部分は産業主義的であり、コンヴィヴィアルな仕方を用いることができない。

産業主義的な道具の過剰成長は制度によって動機づけられる行動と自立的な行動のバランスを歪めたり、価

値を独占したりすることによって社会のコンヴィヴィアリティを奪う。コンヴィヴィアリティとは「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり、またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすもの」である (Illich 1989:18)。人々が他人や環境とのあいだに自立的で創造的な交わりをもつことを可能にするコンヴィヴィアルな社会は、特定の需要をつくり出す道具と人々の自己実現を助ける補足的・援助的な道具とのバランスを保つことで実現される。コンヴィヴィアルな生き方の基本は「節度」や「節制ある楽しみ」であり、節制は「共同体の中でなし遂げられる、勇敢かつ規律をもった、自己批判的な放棄」を可能にする (Illich 2005:77)。コンヴィヴィアルな生活こそ人間の想像力を豊かにし、「自己に対する親密さへの確信を取り戻し、それゆえお互いの存在を認めつつ暮らしていくこと」を可能にするのである (Illich 2005:74)。

2.4 「人間性」概念の理論的枠組み

「人間性」という言葉は二通りの意味をもつ。第一の意味での人間性は「人間に特有の、人間ならば誰もが備えている性質」であり、端的に人間のあり様を表わす言葉として用いられる。第二の意味での人間性は「人間らしい人間がもつ性質」というものであり、人間らしくない人間、人非人と言われるような人間が存在する可能性を前提とする。ある人間を人間らしいか否かを決めるのは道徳的な価値判断であるが、「らしい」という言葉はそれ自体、「本来あるべきようにある」という意味をもっており、規範的な価値をもつ。ゆえに「人間らしさ」としての人間性は「人間がそうあるべきあり方」というような意味で用いられ、その具体的な内容は道徳的な規範として論じられる。しかし、事実判断としての「人間性」と道徳的判断としての「人間らしさ」を厳密に区別すること、またその結果として事実判断から道徳的判断は導出されないと主張することが可能であるとも言い切れない。実際、前節までで取り上げた既存の技術論には、生物的特徴としての人間性が道徳的規範としての人間性と重なっている点がいくつかある。したがって技術と人間のあり方を考える時、その規範形成には「人間とはどのような存在であるか」が重要であると考えられる。よって以下では両方の意味での人間性を念頭に置きつつ、既存の技術論において人間と技術がどのように捉えられてきたかを整理する。

それぞれの技術論の共通認識として「未確定性」が人間の特徴であるということが挙げられる。ゲーレンは人間が「欠如」の性質ゆえに環境をもたず、代わりに世界

を所有するとした。ハイデガーは、人間は自分のあり方を選択できる存在であるとした。イリイチによる人々の創造性を助ける社会の提案は、人間が創造的にも非創造的にもなりうる存在であることを前提としている。環境への適応機能に縛られず様々に己のあり方を変化させる人間は、歴史や文化が示すようにどこまでも可変的である。よって第一の「人間性」概念に数えられるのは「未確定性」である。

ハイデガーとアンダースの議論ではそれぞれ違った仕方、人間が主体性を取り戻すべきであると主張されている。ハイデガーは人間が未確定であることにより生じる「選択」の可能性に着目し、人間が自分の存在を問題化しながら未来に向かって己を投企する主体性を訴えた。アンダースはアポカリプス不感症である現代人が中間的なあり方から脱し、道徳的想像力を形成する性質として主体性を主張する。つまり中間人は自分の行為に対して「能動的とも受動的ともつかない」(Anders 1988:302)あり方をしていて、この認識状態から抜け出して自らの行為の結果を想像したりその責任を意識したりする必要があるのである。以上より第二の「人間性」は「主体性」である。

第三の「人間性」には「唯一性」が挙げられる。アレントは人間の条件として生命、世界性、多数性を挙げたが、多数性は唯一性の裏返し表現である。つまり人間という存在が種としての人間 man ではなく、個々人の集まり men であるということの意味する多数性は、個々の人間が他の誰とも同じでない唯一の存在であることに基づく。個々の人間が誰一人同じでないことは公共空間における活動が成り立つ前提条件であり、活動によって個人はそれぞれの唯一性を他者に開示する。人間的生活において、活動こそが人生の意味をもたらす最も重要な行為である。

したがって未確定性、主体性、唯一性の三つの性質を「人間性」概念の理論的枠組みとして用いることとする。

3. 現代の技術のあり方と人間性

3.1 「人間性」概念からの考察

第一に、人間の対象化という技術のあり方が人間の未確定性に及ぼす影響について考察する。技術は人間の可能性を拡張し続け、今や技術の行使対象は人間自身にまで及ぶ。人間自身の対象化は、欠陥動物としての未確定性を拡張する。例えばナノテクノロジーや遺伝子技術、人体に対する人工知能の融合技術などは人間の生物学的なあり方を変更し、身体機能の拡張や生存条件の緩和

を可能にした。整形や延命、損傷した細胞あるいは臓器の人工的な補完など身体に対する直接的な改変の他に、物理的距離の克服や速度の向上、未知の環境の開拓など間接的な改変の可能性と範囲も拡大している。人間はこれからも科学と技術によってそのつど自分の限界を打ち破り、その可能性を拡大していこう。このような状況から、今日の人間のあり方はこれまでの時代以上に「未確定」なものとなっていると言える。したがって現代技術は第一の人間性である未確定性のさらなる増長を促していると考えられる。

第二に、技術の所有と使用の一体化が主体性に与える影響について考察する。技術の所有と使用の一体化とは、技術が誕生することが直ちにその使用につながるという傾向を指す。技術の開発途中で当初の目的とは別の新たな可能性が発見された場合に、それが実現可能であればその技術を具体的に使用する方向に話が進むということは現代の技術開発では通例となっている(品川 2013:110)。例えば着床前診断は、不妊の解決を目的とする体外受精の成功を受けて新たに誕生し(品川 2013:110)、倫理的に問題化されるも実用化が進んでいる。このように技術開発によって偶発的に生じる新技術とその使用は今日では切り離せない関係にある。その特徴は、使用に目的が先立っていないことである。このような技術のあり方は、人間が自分たちの必要に合わせて主体的に技術を欲し獲得するというものとは違う。そこではハイデガーの言うような「おのれのあり方を自ら選ぶ」主体性が失われているのである。

主体性の喪失は個人のレベルでも生じている。例えば携帯電話やスマートフォンは今日では生活の必需品であるし、美容整形やサプリメントも男女ともに広く受容されている。技術の成果が人々に行き届くことは生活の利便性や個人の容姿の改善に貢献する一方、人々を依存状態に陥らせることもしばしばある。同様の例は、医療や交通や仕事や他の日常的な場面にも生じている。この事態において本質的なことは様式の根源的独占、すなわち技術のおかげで可能性が拡大したにもかかわらず、その技術を使うという様式が他の様式を選択する可能性を奪っていることである。技術を使うという様式が根源的独占を引き起こしている場合、個人は主体的にそのあり方を選んでのではなく、社会や周囲や無意識などによってそのあり方を選ばされている。以上のことから社会や個人と技術の関わりにおいて主体性の疎外が生じていると言える。

また根源的独占は価値の側面でも生じており、唯一性

に影響を与えていると考えられる。圧倒的な利便性や可能性を提示する現代の技術が独占するのは様式だけではない。例えば整形手術の一般化によって人々の容姿の多様性は失われている。人々は美容技術を用いて生まれもった自分唯一の特徴を目立たなくしようと努め、自分なりの美の実現ではなく、美しいものとしての価値を独占している他者の姿に近づこうと努力するのである。したがってこの場合、人々が技術を用いて行なっているのは唯一性の表現ではなく隠蔽である。現代技術による価値の根源的独占によって、人々の唯一性が疎外されていると言える。

しかしすべての技術が唯一性を疎外してしまうというわけではない。例えば整形技術の使用でも、その目的が事故や病気で失った顔や身体の補修である場合は唯一性の疎外が生じるとは言えない。「誰か」を目指した唯一性の隠蔽ではないからである。したがって技術と人間性の関係はその目的を考慮して判断されるべきなのであり、技術そのものではなく技術のあり方が問題になっていると言える。

3.2 問題の所在

今日の技術の担い手は人間自身という新たな対象領域を開拓し、また依然として宇宙や海底を人間の住む環境にすることを考えている。これにより人間の可能性は拡大し続け、人間はいっそう未確定性を増している。しかし一方で、可能性と利便性に満ちた現代技術による様式と価値の根源的独占とも言える状況が生じ、主体性や唯一性といった「人間性」が疎外されている。つまり現代的な技術のあり方では、人間性のうちで未確定性だけが尊重され、主体性や唯一性は考慮されていないということである。未確定性だけが尊重される傾向は、技術という営みがそもそも人間の身体的・本能的欠如を補うためのものであり、環境ではなく世界を所有するという事実に対応するものであるということに由来するものと考えられる。

現代における人間性疎外の問題は、他の人間性を顧みず未確定性のみを重きをおいて可能性の拡張を進めた結果である。これによって問題となるのは人間が主体的な唯一の個人として存在していないこと自体ではなく、そのようなあり方が技術の獲得と使用の一体化や様式と価値の根源的独占によって閉鎖されていることである。

3.3 技術と人間性の調和に向けて

技術の現状において最も重要なことは、われわれが技術によって未確定性を増大させることには熱心である

が、主体性と唯一性に対する配慮が不十分であるためにそれらの人間性が疎外されているということである。したがって現代の技術のあり方を考える際、未確定性だけでなく主体性と唯一性をも並立させることが肝要である。未確定性増進の一方で他の人間性が疎外される原因は、技術の獲得と使用の一体化にあると考えられる。つまり技術の実行可能性が、その必要性や目的に先立ってしまっているからである。技術の必要性や目的が究極的には人間の幸福であるならば、それを人間性の観点から考察する必要がある。にもかかわらず未確定性への意志のみが技術の使用を押し進めている状況に、われわれはもっと自覚的になるべきである。

また技術と人間性の調和のために技術の限界を定め、しきい値を設けるという考え方がある。しかしそのような量的な見方の他にも、質的な見方も必要ではないだろうか。唯一性疎外の場合のように、その技術のすべての使用が人間性を疎外するのではなく、その使用目的によって人間性が疎外されたりされなかったりすることがあるからである。したがって技術のあり方は量的な側面と質的な側面の両方から検討されるのが望ましいと考えられる。

4 結論

最後に、本稿のはじめに立てた問いに対する結論をまとめる。まず人間性とは何かという問いに対しては既存の技術論を参照し、「未確定性」「主体性」「唯一性」という三つの「人間性」を挙げた。次に現代の技術のあり方についての考察をこれらの「人間性」概念から行ない、未確定性が増大し続ける一方で、主体性と唯一性が疎外されていることを明らかにした。さらに現代技術と人間性の調和に向けての考察として、現代の技術のあり方が引き起こしている人間性疎外の重要な問題点を指摘した。すなわち目的に先立つ技術発展によって、人間性の並立に向けた配慮がなされないまま技術が使用される点である。技術発展の究極の目的は可能性の拡大ではなく人間の幸福であり、したがって人間性の観点から技術の使用が考えられなければならない。さらに、これからの技術のあり方を考える際に重要なこととして、量的・質的な側面への視点が不可欠であることを述べた。しかし本稿では人間性との両立に配慮したこれからの技術のあり方については抽象的な展望を述べるにとどまった。現実の社会に即した視点から人間性との調和が可能な技術のあり方を具体的に模索することは今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 青木隆嘉, 1994, 「(解説) ギュンター・アンダーズの哲学」, 『時代おくれの人間・上』 373-417, 法政大学出版局.
- 2) Arnold Gehlen, 1940, *Der Mensch. Seine Natur und seine Stellung in der Welt.* (= 亀井裕訳, 1970, 『人間学の探究』, 紀伊國屋書店.)
- 3) Andrew Feenberg, 1999, *Questioning Technology.* (= 直江清隆訳, 2004, 『技術への問い』, 岩波書店.)
- 4) 石田三千雄, 2007, 『シリーズ〈人間論の21世紀的課題〉② 科学技術と倫理』ナカニシヤ出版.
- 5) 伊藤 洋典, 1991, 「ハンナ・アレントにおける政治概念の基底: 「世界」概念の構造と「活動」の観点から」, 『法政研究』58(1):71-125.
- 6) Ivan Illich, 1973, *Tools for Conviviality.* (= 渡辺京二・渡辺梨佐訳, 1989, 『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディターズスクール出版部.)
- 7) Ivan Illich, 1992, *Ivan Illich in Conversation interviews with David Cayley.* (= イヴァン・イリイチ, 2005, 『生きる意味—「システム」「責任」「生命」への批判』, 藤原書店.
- 8) 今出敏彦, 2006, 「公共性の現在: ハンナ・アレントの公共性論の今日的意義」, 『宗教と公共性』2006:75-88.
- 9) 宇都宮芳明, 1972, 「道徳と人間性」, 『北海道大学文学部紀要』20(2): 91-146.
- 10) 笠松幸一, 2008, 『21世紀の倫理』八千代出版.
- 11) 加藤尚武, 1996, 『技術と人間の倫理』日本放送出版協会.
- 12) 加藤尚武, 2003, 『ハイデガールの技術論』理想社.
- 13) 木田元, 1983, 『ハイデガー』岩波書店.
- 14) Günther Anders, 1988, *Die Antiquiertheit Des Menschen I.* (= 青木隆嘉訳, 1994, 『時代おくれの人間・上』, 法政大学出版局.)
- 17) 品川哲彦, 2013, 「技術、責任、人間—ヨナスとハイデガールの技術論の対比—」, 『Heidegger-Forum』7:110-122.
- 18) 鈴木善次, 1998, 『科学・技術史概論』建帛社.
- 19) 瀧井宏臣, 1999, 『テクノ文明の未来』明石書店.
- 20) 竹原弘, 2004, 『人間存在論 現象学と仏教に基づく存在論の試み』ミネルヴァ書房.
- 21) 田中直, 2012, 『適性技術と代替社会—インドネシアでの実践から』岩波書店.
- 22) 土屋俊, 1999, 「技術の変貌と再定義」『問われる科学/技術』岩波書店.
- 23) 西村勝彦, 1965, 『大衆社会』誠信書房.
- 24) 西山卯三, 1978, 『人間の尊厳と科学』勁草書房.
- 25) Hannah Arendt, 1958, *The Human Condition.* (= 志水速雄訳, 1994, 『人間の条件』, ちくま学芸文庫.)
- 26) 細谷貞雄編, 1977, 『世界の思想家24 ハイデッガー』平凡社.
- 27) 松井富美男, 2003, 「人間の尊厳とは何か—差異化と水平化の二重機能—」, 『生命倫理』13(1), 58-62.
- 28) Martin Heidegger, 1949, *Die Frage nach der Technik.* (= 小島威彦訳, 1965, 『技術論』理想社.)
- 29) Martin Heidegger, 1927a, *Sein und Zeit.* (= 熊野純彦訳, 2013, 『存在と時間(一)』岩波書店.)
- 30) Martin Heidegger, 1927b, *Sein und Zeit.* (= 熊野純彦訳, 2013, 『存在と時間(二)』岩波書店.)
- 31) ミシェル・ティボン=コルニヨ, 2005, 「現代技術の撃波—工業社会の不安定と消滅—」, 『風土と技術の近代: 国際シンポジウム報告書』国際シンポジウム《風土と技術の近代》実行委員会.
- 32) 村上陽一郎編, 1981, 『知の革命史7 技術思想の変遷』朝倉書店.
- 33) 村田純一, 2012, 「技術の創造性—ハイデッガーと技術の哲学—」, 『科学と技術への問い—ハイデッガー研究会第三論集—』理想社.
- 34) Ray Kurzweil, 2005, *The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology.* (= 井上健訳, 2007, 『ポスト・ヒューマン誕生—コンピュータが人類の知性を超えるとき』日本放送出版協会.)
- 35) 山口修二, 2007, 「現代文明と技術」『シリーズ〈人間論の21世紀的課題〉② 科学技術と倫理』ナカニシヤ出版.